

ミルトンの詩の叙情性

植 木 敏 一

ロマン派の詩人たちの詩とミルトンの詩とを比較してみると、両者の間にはなんらかの相違はあるとしても、自然に対する叙情、人間に対する叙情とは何らかの伝統によってかたく結びつけられているのであろう。^④ というのもロマン派の詩人たちは、ミルトンの詩、特に「失樂園」をこれらの多数の詩人たちは、シェクスピアの詩同様に読んでいたのである。^⑤ そもそも、詩人は叙情性のみが必要条件であろうか。いや、叙情性のみで詩の創作はその目的は達せられないだろう。想像力も必要であろう。空想も必要であろう。象徴主義もアレゴリーその他の詩の技術も必要であろう。そうであるが、まず叙情性がなくてはならない。ここで云う叙情性とは詩人自身が感動や情緒を韻文形式で主観的に述べる心の動流的本質である。もともとは、古代ギリシヤから発生しているものである。この叙情性なるものは、あくまで詩人の個人的な感情の直接的な表出でなければならない。敷衍すれば、どの詩もただ一つの思想、感情、状況を扱うことになる。テニソンの

“Break, break, break, And the stately ships go on”

とか、ブレークの

“Tiger, tiger, burning bright

In the forest of the night !”

のような純粋な感情の流出もあり、ワーズワスの *Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood* のような哲学的思索的なものがあり、その他に宗教的、恋愛、自然的なものもありその種類は多数にのぼり、また劇や長詩—叙事詩も含めて—の一部として書かれたものもあり、ここで論述しようとするのは、後者に属するものである。^⑥

さて、この論をすすめるにあたって、自然と人間と二元論に区分して書くことは私の本意ではないが、便宜上この前提のもとに考えてみる方がよいのではないだろうか。

1667年に「失樂園」を出版する運びになったが、16年間自然を見ることが不可能な状況にあったが、いかにして「失樂園」のなかで自然の美を描写し得たのであるのか。ミルトンはすべての書籍を通じて見た自然であると批評家は云っていたが、この事実の一部は真実であったとしても全面的にそうであったということには賛同し得ないのである。彼の眼では観察できなかったのが、想像力と空想の助けをかりていたのは事実であったとしても、ワーズワスのいわゆる「心眼」であって、ミルトンの心にはその都度のイギリスの自然が鮮かに焼きつけられていたのであろう。そのうえに、幼くして養われていた美を追求する熱烈な情熱と感動が彼の成功を齎したものであろう。T. Coleridge の *Biographia Literaria* の第十四章の In Consequence we have eyes, yet see not, ears that hear not, ears that hear not and hearts that neither feel nor understand という有名な言葉があるが、これからも理解ができるであろう。従ってミルトンはたしかに健全な心眼をもっていたように思う。またミルトンは詩作の際に常に考えていたのは調和という精神であった。ミルトンの描いた自然は殆んど全作品の随処に見出されるが、しかもこの自然には絵画的とまで

いえる立体的な美が発見できるのである。ミルトンはこの上に音に対する感覚、つまり音楽的に人の心に訴えなければならぬといった深慮さえもっていたことがうかがいあがってくるのである。つまり眼よりも耳の方が勝っているということを知っていた。この方がミルトンには好都合であったであろう。従ってそういった音への心労を除いては彼の詩の味読は不自然であろう。その手段とはblank verseの使用であろう。このblank verseの使用がロマン派詩人たちにも大いに影響を与えたということが云い得よう。そもそも想像の詩と情緒の詩とに分けて考えうるとすれば前者はもっとも楽しいイメージを喚びおこす力であり、与えられた事物を刺戟する関心の力によっており、外界の自然と親んでいたその根底には道徳が存在しており、後者は記憶と創作の力からおこる感受性からといわれている。ミルトンの詩はこのような二つの要素から成り立っているように思われる。すなわち想像力と知的道徳情をもっていたことは明かである。これは Chaucer, Shakespeare や Spenser がミルトンと同じ伝統的な共通性をもっていたのではないかと思う。19世紀ロマン派の詩人たちは詩とは元来音楽と感情の詩であると考えていたが20世紀になるとロマン派に属する詩人たちはミルトンの思想へ移っていったという事実から判断して、もともとロマン派の詩人たちはミルトンの音楽性と叙情性へ接近していたことが理解されるであろう。

また他の問題はといえば、たとえばブレイクとシェリーとバイロンが興味を抱いていたことがサタンへの関心事であったことから想起できよう。従って、ミルトンの詩がいかにあるべきかという本質的な問題を無視してミルトンの感情に従っていったのである。

たとえば、「失樂園」第一巻において人間の反逆と人間のおかれた樂園をそのために失ったことを提示する個所の一部において

Thir Glory withered, As when Heavens Fire
Hath scath'd the Forrest Oaks, or Mountain Pines,
With singed top their stately growth though bare
Stands on the blasted Heath, He now prepar'd
To speak; whereat their doubl'd Ranks they bend
From wing to Wing, and enclose him round
With all his Peers: attention held them mute,
Thrice he assayed, and thrice in spite of scorn,
Tears such as Angels weep, burst forth: at last
Words interwove with sighs found out their way. (P.L. I 612-21)

は、人間が犯した過失のために天使たちは、天を奪われ永遠の栄光より投げ出されても忠実に立っている姿は実に悲痛なまでに悲しみの世界を描き出しているなかに天使たちの苦しみ耐える叙情の方法をとっている。私は、次の大前提 1. ミルトンの自然に対する描写から 2. ミルトンの人間に対する描写から小前提、即ちこれを敷衍すれば、

- (1) 人間の心の憧れ、つまり現世と人間の住むべき世界、静寂なる世界
- (2) 人間の叙情は自然の叙情よりも直接的な世界、劇しい世界
- (3) (1)と(2)との混合型

と分類して考えたいのである。すると、さしあたり前掲の詩行は(1)と(2)との混合型であろう。荒涼たる野原において天の火が焦がしているなかにあって人間の力の弱いことであろう。また(1)にあっては自然の叙情は、

And all amid them stood the Tree of Life,
 High eminent, blooming Ambrosial Fruit
 Of vegetable Gold; and next to Life
 Our Death the Tree of Knowledge fast by,
 Knowledge of Good bought dear by knowing ill.
 Southward through *Eden* went a River large,
 Nor chang'd his course, but through shaggie hill
 Pass'd underneath ingulft, for God has thrown
 That Mountain as his Garden mould high rais'd
 Upon the rapid current, which through veins
 Of porous Earth with Kindy thirst up drawn,
 Rose a fresh Fountain, and many a rill
 Waterd the Garden; thence nunited fell
 Down the steep glade, and met the neather Flood,
 Which from his darksom passage now appcars,
 And now divided into four main streams,
 Runs divers, wandering many a famous Realme. (P. L. IV217-34)

自然は静寂であり、平和であることが人間の心を喜ばすものであるが、時には悪をもたらすこともある。言葉を換えて云うならば、‘severe’であると同時に‘beautiful’でもある。

むしろ、「失樂園」よりも海上で、死んだ親友を弔むと同時に当時の腐敗僧侶の滅亡を予言している「リシダス」において美の追求^④が完全で熱烈であったように思う。Parker^⑤が美に対する憧憬としてはミルトンが幼少の頃より恋愛詩を読み耽っていたことや、少女特に美しい少女に対する憧憬を抱き一目惚れをしてしかも独特な情熱を傾けたことを書いている。その情熱とは何かといえば‘with sweet misery’なのであった。

ところが彼の燃した恋は Parker の語を借れば‘literally’であり、すぐ sonnet とか Latin Verse の詩型によって恋心を公けにした。そして、それを追憶して密かに恋の焰をもやし続けたということを書いている。というのは恋には‘good’と‘virtue’が伴ってくるからだろうと云っている。

ミルトンは次のように自然の描写をしている。

On to thir blissful Bower; it was a place
 Chos'n by the sovran Planter., when he fram'd
 All things to mans Delightful use; the rooffe
 Of thickest covert was inwoven shade
 Laurel and Mirtle, and what higher grew
 Of firm and fragrant leaf; on either side
Acanthus, and each odorous bushie shrub
 Fenc'd up the verdant wall; each beauteous flour,
Iris all hues, Roses, and Gessamin
 Rear'd high thir flourish heads between, aand Wrought
 Mosaic; underfoot the Violet,
 Crocus, and Hyacinth with rich inlay

Broiderd the ground, (P L IV 690-702)

において当時イギリスでは一般に愛好されていた花を並べてその場所を情熱を含めて書きあげる。しかし、この平和にして楽しい生活にも 'Now had night measur'd with her shaddowie Cone' といった影がさしこの楽しい生活から一転して楽園追放とい暗示を与えている。さて evening についてであるが、

Now came still Evening on, And Twilight gray
Had in her sober Liverie all things clad;
Silence accompanied, for Beast and Bird,
They to thir grassie Counc, these to thir Nests
Were slunk, all but the wakeful Nightingale;
She all night long her amorous descant sung;
Silence was pleas'd: now glow'd The Firmament
With living Saphirs: *Hesperus* that led
The starie Host, rode brightest, till the Moon
Rising in clouded Majestie, at length
Apparent Queen unvaild her peerless light,
And o're the dark her Silver Mantle threw. (P.L. IV 598-609)

において夕暮の叙情が我々の顔前に浮びあがるのである。第一巻と比較してみると、全くの相違が認められるのである。静と動、相反する二元的な対照に気がつくであろう。実に美しく崇高にして明るく澄み切ったリズムを伴って我々の心に迫ってくるものがある。

また、夕暮の描写にしても「コウマス」においては、美は「自然の自慢の作です」(Beauty is natures coyn) —Comus 738— といっているが、自然に対する心の動きには二つの表現法が発見できるであろう。一つは静寂で平和である。これによって、調和のとれた美を浮上させるし、他の一つは実に愉快的気分をもりたてる音楽ともなる。

The Star that bids the Shepherd fold,
Now the top of Heav'n doth hold,
And the gilded Car of Day,
His glowing AXle doth allay
In the steep *Atlantick* stream,
And the slope Sun his upward beam
Shoots against the dusky Pole,
Paciing toward the other gole
Of his Chamber in the East,
Mean while welcom Joy, and Feast,
Midnight shout, and revelry,
Tipsie dance, and Jollity. (Comus 93-103)

夜の自然は快樂の場と化している。まさしく静に対して動ともいうべき叙情である。これらの二つの情景はミルトンが興味をもっている夕暮から夜にかけての差異が生じる。こ

れほどの経過は「時」にもふれている。このような描写はロマン派の詩人たちに大きな影響を与えずにはおかない。この夕暮の「時」は神への感謝と敬虔の祈りに適した「時」である。またそのような意味を示唆している。ナイティンゲールの鳴き声は沈黙を伴い楽園追放前にはアダムとイヴは感謝でいっぱいであった。

.....and sweet the coming on
Of grateful Evening milde, then silent Night
With this her solem Bird and this fair Moon,
And these the Gemms of Heav'n, her Starrie train, (P. L. IV 646-9)

イヴは自然と渾然一体となって快よい陶醉の境地に浸っている。また、

Thus Adam to himself lamented loud
Through the still night, not now, as ere man fell,
Wholosom and cool, and mild, but with black Air
Accompanied, with damps and dreadfull gloom, (P. L. X 845-8)

この場合においては靄や霧が立ち込めている。これは詩人としては美を付与していこうという試み以外なものもない。ここにも調和、均衡の初志を貫徹し、その最高の均衡美として薄暮を好んでいる。夕暮は突然に我々に迫るものではない。灰色の夕暮、すべてのものは澄みきっている。そして沈黙がなんとも云えなく我々の心を喜ばしてくる。ここでミルトンは最も完璧な美の創造を企てている。彼はこの光景に接して興奮をおぼえたことであろう。ところで、この夕暮には季節とか時間の制限はもちろんなのである。そしてこの薄暮に対しては chaos が考えられるが、この chaos には神に対して感謝の念も敬虔の念も伴わない。むしろ美に対しては醜である。次に朝だが、“So all was cleard” (PL V 136—52) を通してはミルトンの詩としては、情緒の不安定に気付くであろうが、彼としては新鮮であり純潔であり、光明の象徴とも解せられるが、神（創造主）を崇め、祈りを捧げる心の高まりをおぼえる時でもあり、ここから流れ出る「ことば」の流暢さを駆使して詩人は熱烈なる美を見出そうとする。

また、朝においては自然は若返ったように跳ねまわり、処女らしい空想を逞しくして、不規律のために実に心地よく、度はずれな幸福を注いでくる時でもある。また「あずまや」は肉欲的な愛を意味することもあり得るから不規律でもある。また換言すれば霊的な愛と肉欲的な愛と結合する時でもある、場所でもある。神から人間に与えられている一つの経験であって、罪とか羞恥でもないほど聖なる時であり、究局的に神の意志に合致するといった調和的精神の発想でもあって朝を描くにも我々の描く朝ではなく、感覚的に捉え、美感に訴えている。恐怖と驚愕とは必ずしも明かということではないが、自然については現実と超自然との区別を立てている。建築的美の構図を与えるというよりはむしろ絵画的美と音楽美を追求しているように見える。またそのように情熱を意識的であろうと無意識的であろうと激情を流出している。天国と地獄の描写についても同じようなことが云えるのではなからうか。つまり情熱的と云ったが、要言すれば心で描きあげているのであろう。

さて、人間に移ろう。多くの作品のなかで、最も心を打つのは「闘士サムソン」であ

ミルトンの詩の叙情性

る。ペリシテ人の圧政から、イスラエルを解放するようにとの使命をおびて生れ、怪力をふるってペリシテ人を悩ましたサムソンが、妻に口説かれて、怪力のあるところを云ったために敵に捕えられえぐりとられた両眼をもって敵地ガザの獄舎に撃れて石臼をひいている。逐にペリシテ人は彼に余興を所望した。ここでサムソンは大演技場の大黒柱を引き抜いて、崩れ落ちる屋根の下でペリシテ人と悲壮な死をとげるとというのがこの劇の筋である。人間の弱さと盲目という重荷を負って、自分の怪力の絶対性を信じて、すべての快楽を奪われ、人間の耐えられない詐欺、軽蔑、虐待にさらされている。

As in the land of darkness yet in light,
To live a life half dead, a living death,
And buried; but O yet more miserable!
My self, Sepulcher, a moving Grave. (S. A. 99-101)

実に人間として、逃れることのできない窮地に追いやられたこの闘士サムソンは上演される劇としてではなく、読むべき劇詩としての存在理由が認められている。サムソンの怪力は神の賜であって妻の座を去って行った女のみがこの秘密を知っているのだがこれを敵に内通したために怪力も効を失ったのである。もと夫婦だったこの二人の間には互に愛情が憎悪に悪い意味において変っている。合唱隊はペリシテの女―裏切者―を平静な句調で叙情的に歌うのである。

That so bedeckt, ornate, and gay,
Comes this way sailing
Like a stately Ship
Of *Tarsus*, bound for th' Isles
Of *Javan* or *Gadier*
With all her bravery on, and tackle trim,
Sails fill'd, and streamers waving,
Court'd by all the winds that hold them play,
An Amber sent of odorous perfume
Her harbinger, a damsel train behind;
Some rich *Philistian* Matron she may seem,
And now at nearer view, no other certain
Then *Dalila* thy wife. (S. A. 712-24)

実に美しい詩である。音楽とも云える。そしてもとの妻は執拗に男の心をもとに戻そうとして、デリラも貴男をこのような状態にしたのは、心の弱さがあったのだ、怪力の秘密を知りたいばかりにあなたを苦境に追い込めたのだと詫るのだがサムソンは女王をゆるさないデリラがサムソンに迫ってくる情熱は全く劇しい、そしてこの劇しさは益々度を加えてくる。これと調子を合せて詩人の情熱は頂上に達する。

さて、「失樂園」のアダムとイヴに戻してみよう。

The word was all before them, where to choose

Thir place of rest, and Providence thir guide:

.....

Through Eden took thir solitarie way. (P.L. XII 646-9)

この最後詩句において、ミルトンは情熱の烈しさもなく、心痛もなくアダムとイヴは神から自由を得たという幸福感を諦観が読者に安堵感を一そう強固なものとする。これは映画の最後にもなるような終末である。詩人の心も実に平穏である。

このように考えてくると、主として自然のみを取扱っているところでは叙情の手法は静かであり、人間のみを取扱っているところでは相当感情の起伏が認められ、二つの混合型では平穏あるいは混合度が感じられ、コールリッジが云う meter と rhthm と blank verse を利用して、その場その場の美を浮き彫りにした詩の創作をみることができる。

参 考 文 献

- ① Joseph Anthony Wittreich, J. R. *The Romantics on Milton* 1970 The Press of Case Western Reserve University, Cleveland London
- ② Ibid., Cover.
- ③ 福原麟太郎編 文学要語辞典 研究社
Roger Fowler: *A Dictionary of Modern Critical Terms* Rouledge & Kegan Paul
- ④ *London Magazine* October 1820.
- ⑤ William Riley Parker: *Milton A Biography I* 1968 Oxford: at the Caredon Press.
- ⑥ J. D. Simmonds (ed.,) *Milton Studies Vol VI Milton's Evening* by Dustin H. Griffin (Vol 1—VIII)
- ⑦ Frank Allen Patterson *The Student's Milton* Appleton-Century-Crofts, New York.